堀川開削410年をふりかえる

堀川をめぐる人びと

いつも心に川がある
堀川まちづくりの会企画展

堀川に名を刻む愛知県初代土木課長　黒川治愿

黒川治愿（はるよし） 県に着任　稟性果鋭敏警人に絶し、心計に富む

明治維新後の名古屋を活性化するため、熱田港の整備や庄内川から堀川への分水、新木津（こっつ）用水の改修による木曽川と堀川の運航が計画され、県令安場保和（やすばやすかず）は県に赴任したばかりの黒川治愿に指示し、明治９年（1876）に着工した。

明治末頃の熱田港　右の建物は大阪税関支所（絵葉書）

まず熱田湊の浚渫（しゅんせつ）を行い、階段式の波止場を設け、明治 10 年に熱田港となる。また同年 10 月に庄内川と堀川が繋がり、計画を推進した彼の名前から黒川と呼ばれることになる。さらに木津用水改修と新木津用水拡幅に挑み、明治 27 年、ついに木曽川と堀川が繋がる。

庄内川分水工事と新木津用水工事は、後世に黒川治愿の名が語り継がれる事業となった。

「稟性果鋭敏警人に絶し、心計に富む」とは『名古屋市史人物編』の黒川治愿評である。

黒川治愿

水害多発の輪中に育ち治水に邁進

黒川治愿は弘化４年（1847）美濃国佐波村（現：岐阜市柳津町）の庄屋川瀬家の次男として誕生し、同村の勤王論者で木戸孝允らと交流のあった磊落の人木蘇大夢（きそだいむ）に学問を学んだ。長じていったん家業に就くが、発起して明治元年（1868）京都に遊学。翌年京都で役人となり、御所役人の黒川氏に見込まれて養子になる。香川県、名東（みょうとう）県（徳島県と淡路島）の県吏を経て明治８年愛知県に赴任した。

明治 13 年愛知県の初代土木課長に就任するが、その前後から多くの治水工事にたずさわっている。

明治 12 年、排水不良に難儀する立田輪中（現：愛西市）を鵜戸川の延伸によって改善。ついで、矢作川から取水し西三河南西部を灌漑する明治用水本流の大工事に関わり 13 年に完成。同じ年に、慶応４年の「入鹿切れ」で 941 人の死者が出た入鹿池堰堤の改修、15 年には「久後切れ」で死者 43 名を出した岡崎乙川の大規模治水事業に着手して 3 年後に完了。16 年犬山周辺の村々に水害を多発させていた郷瀬川改修、17 年宮田用水樋門の増築など精力的に働いた。

庄内川では洗堰の土砂を明治 11 年に浚渫して川底を下げ、14･15 年の二度にわたる洪水で壊れた洗堰の改築も手がけている。治水だけでなく、17 年、中山道ルートで着工予定の鉄道を東海道ルートに変更するため名古屋区長の吉田禄在らと鉄道局長井上勝に陳情して、変更の決定を得ている。

そうした瞠目すべき活躍のなか、明治 18 年に 38 歳で愛知県職員を辞職し、その後は農業をしながら余生を送って、明治 30 年 5 月 29 日に南久屋町の自宅で病没、故郷の佐波村に眠る。

謎につつまれた壮年での引退

佐波輪中にあった治愿の生地である佐波村は、古くから境川の氾濫に悩まされ続けたところで、そのことから治水について強い関心を持つようになったという。治水事業に深く関わり務めに邁進していく姿は、上記した例からもよく窺われ、八田川御幸橋畔の遺沢碑、随所の報徳碑の碑文などによっても知られる。

治愿は明治 20 年に再任要請されても病を理由に断っている。名古屋市史によると、「立田輪中の事業方針を巡り、自分の意見が入れられず退任した」とのことだ。この年にデ・レーケが木曽三川分流計画を立てており、立田輪中の計画に納得が出来なかったということかと。このあたりは土木技術の観点の違い以上に個人史的価値判断が根底にあるようにも思われる。

ともあれ、名古屋市中区の政秀寺に黒川治愿の業績を讃える碑が安場保和撰により建立され、それは現在平和公園に移されている。黒川治愿は名古屋の堀川にとってだけでなく、近隣の人々にとっても偉大な貢献をした土木課長であった。

黒川治愿君遺沢碑と報徳碑（八田川御幸橋畔）

故黒川治愿君之碑（平和公園）